

スコットランド啓蒙における自然哲学の意義と役割⁽¹⁾

—エマアスンの見解によせて—（2）

高 田 紘 二

V

ここでは17Cの初期以降の医学と医学教育を中心に、世俗の人々の、自然哲学と科学にたいする関心と態度についてみてみよう。

エマアスンによれば、⁽²⁾ エディンバラ外科医組合Edinburgh Incorporation of Chirurgeonsは、1640年代に、かれらの徒弟たちの教育のためのグラマ・スクール grammer schoolを要求した。1660年代には、それほどでもなかったが、1680年代には、組合は徒弟たちがもっと多く大学に進学することを期待し、奨励しており、かれらの会員の何人かが外国の大学で研究しているのを誇りと思っていた。このような能力と資質の向上をめざす教育的側面の充実は、他方で、1640年代には組合によって主催された解剖学の特別教育によって図られ、遅くとも1656年には、薬学 pharmacy 教育のために利用される植物園⁽³⁾が設けられた。このような傾向は、今やこれまでの理髪師＝外科医としてではなく、外科医＝薬剤師としての本来の医師としての資格の養成と確立を奨励し促進するものであった。⁽⁴⁾（263）

以上のことはささいなことではあったが、増大しつつあった知識と、伝統的な徒弟身分の持つ医者としての能力と資格の不十分さと不適切さにたいする、はっきりとした影響と反応を、医師のなかで最大の部分を占めていた階級——すなわち外科医——のあいだに引き起こしたという意味で、看過できないものであった。この小さな始まりは、17C末以降の印象的な事業計画（後述）にたいして先例をなすものであった。（263）

ところで、内科医 physicians のあいだにも、同じような動きがみられた。

17C初めと中頃にかけて、エディンバラの内科医たちは、医者としての資質と能力の水準を維持し向上させるために、スコットランドの全体にわたって、医者としての実践と訓練とを規制するこ

とのできるような団体組織をロイヤル・コレッジのかたちで創設することを要求した。このように、コレッジ内の医学者 doctors は、自分自身の権威を高めることを望んだだけではなく、内科医・外科医及び薬剤師など全体の教育水準を高めようとしたのである。しかしながら、これらの目的は、エディンバラの外科医とスコットランド内の開業医たちによって、強い疑念と疑いをもって見られ、1681年⁽⁵⁾までは不成功に終わっていた。ところで、スコットランドの南西部では、グラスゴウ内科医・外科医組合 Glasgow Faculty of Physicians and Surgeons が、かれらの診療実践を効果的に規制しており、17C全般にわたって、この地域の医学・医療水準の維持とその向上にたいする権限を行使していた。また、グラスゴウ大学が1637年に行った医学教授の任命⁽⁶⁾にも関係があったと推測されている。（263-4）

エマアスンによれば、上述の植物学と薬学の Sir Andrew Balfour と Sir Robert Sibbald は、薬剤師たちに新鮮な薬草を供給し、また、内科医の徒弟たちのための教育の場所を提供する、植物園を設立した。この設立そのものは、さらにかれら（とくにシッバルト）のヴァーティウソウ virtuosou としての関心を実現し、スコットランド薬学に、より多くの各地産の薬草を収集し導入することを意味していた。1675年、ザザランド James Sutherland —— 広範囲にわたるヴァーティウソウ的関心をもつ古物研究・収集家（アンティークエアリ）antiquary —— が管理者に任命され、タウン・カウンシルの支援によって、その規模も拡大された。翌年〔1676年〕、サザランドは、教授資格をもたないが大学に席を置き、給料も保証された。1683年に出版された植物園の植物目録の献辞——エディンバラ市長への——のなかで、かれは次のようなことを述べている。すなわち、外国との通信によって、レヴァント地方、イタリ

ア、スペイン、フランス、オランダ、東西インドから、種子と植物の両者を手に入れるためになされた、かれの配慮と勤勉について、また、一年の全季節にわたって行われた多くの苦勞の多い旅行によって、スコットランド全域で産出される、すべての種類の植物とその種子をできるかぎり探し出すためになされた、かれの配慮と勤勉について、書いている。かれは1695年にはタウン・カウンシルの支援によって大学の教授となったが、これによって、医学に関連した植物学が制度化されたことになる。かれの仕事は王室によっても支援され、1699年には国王付きの植物学者 King's Botanist に、1710年には植物学の名誉教授に任命された。これらの任命は、かれとかれの植物学がジャコバイト派のロイヤリストによっても（革命前）、ウィッグ派の人々によっても（革命後）、厚遇されていたこと、すなわち、科学と科学者の価値がかれらの政治的・宗教的立場や見解から独立して（完全にではないが）評価されたことを、示すものとして、興味ぶかい。⁽⁸⁾ (264-5)

エマアスンによれば、上述の植物学と薬学の研究促進の成功は、シッバルトによって推進された別の活動にもいくらかを負っていた。シッバルトは1680年に医学クラブ⁽⁹⁾を主催し、かれのエディンバラの住居に集まって、広範囲にわたる問題を論じた。かれによれば、このクラブの隔週の集会では、「外国〔の通信者〕からの手紙〔のなかで伝えられたいろいろな問題〕について論じ〔当時の内外の〕知識人にもっとも注目されていることに説明をあたえ、われわれの患者に生じた希少な事例、改良への傾向をもつ書物——医学や自然史にかんする——について、また、他の珍しい知識について、説明をあたえたりして、コレッジ・オブ・フィジシアンズ College of Physicians の設立〔1681年〕まで続けられた。」⁽¹⁰⁾

コレッジの創設は医学者たち M. D. s に、エディンバラとその周辺での医療実践にたいする従来より大きな管理・統制の手段をあたえたのはもちろん、医学教育の充実と向上に寄与するとともに、かれらが指導する必要があるとおおいに考えていた、外科医と薬剤師たちの診療実践にたいする、規制・監督を要求する資格・条件と権利をあたえることになった。また、かれらの影響力はエディンバラ大学にまでおよび、1685年には大学に

三つの医学教授職がタウン・カウンシルによって創設され、コレッジのフェロオたちがこれらのポストを占めた。このように、コレッジは18Cを通じて、大学の医学とそれに関連ある学科目の教授職の創設・拡充を主唱するとともに、そのポストにつくのにふさわしい人を推薦し、供給するという、ジンジャ・グループ ginger-group〔党派内の革新派〕の立場を守りつづけた。たとえば、さいしょに教授に任命された三人——シッバルト、ハルケット James Halket、ピットケアン——は講義で実際に教えることはなかったが、かれらは当時タウン・カウンシル、コレッジ・オブ・フィジシアンズ、外科医組合⁽¹¹⁾〔前出〕や有力政治家たちによって共通にもたれていた目標と関心——すなわちスコットランド内の医学教育を促進・向上させたいという愛国的熱望——を一身に具現している、医学者団体を構成していた。とりわけ、シッバルトとピットケアンは医学教育の将来計画の立案・実行・推進に参画し、さらにバルフォアなどと協力して、エディンバラ大学だけでなく、その他の大学における、いろいろな科学関連の学科目の教授職の創設を促進し、これらのポストに就くことを志望・志願する人々を養成・育成するのに力を貸したり、それらのポストへの任命をパトロネッジ⁽¹²⁾した。このようにして、1690年までには、医学教育のための直接的条件のみならず間接的な、学問的・制度的環境の整備——医学教育推進のための——という、先行条件がエディンバラで確立されていた。(265)

ところで、エマアスンによれば、1650年ごろより以降、スコットランドでは、自然哲学に興味をもつグループ——上流階級の古物研究・収集家 genteel antiquaries、ヴァーティウソウ、医学者など——やアカデミックスの数が増大しつつあった。これらが上述の医学教育の発展を支え促進する客観的土壌を作りだしたことはまちがいないが、これについて、簡単にみてみよう。

上にあげた人々は、しばしば外国——主として、オランダ、フランス、イタリア——で教育を受けたが、その経験によって、スコットランドの後進性を十分に自覚・意識させられていた。かれらはこの後進性をいわゆる改良 improvement をつうじて治療しようと意図したのであり、このような改良活動の一貫として、1690年代までには、スコッ

トランドにおいて自然哲学・科学と科学者の価値——それ自身の及び宗教的・改良的価値——の制度化のための社会的基礎を、大学や医学団体のような制度的・組織的環境の外部やそれをとりかこむ広範な社会的分脈のなかに築いていた。(266)

1630年代と1660年代とのあいだに、スコットランドでも、比較的多くの人々——歴史家、地理・地誌研究者 geographers、古物研究・収集家からなる集団——が、自国の自然史および文明史に関連する事柄や事跡を、保存し、理解するために、活動し、また、これらを収集し、記述したりした。たとえば、ロバート・ゴードン Robert Gordon of Straloch が行った測量と地図製作の仕事は、ブロー John Blaeu によって、1654年に印刷されたスコットランド・アトラスのなかの地図を可能にしたし、他の人々によって残されたマニユスクリプトの類や、コイン、メダル、シール seals および他のあらゆる種類の物の収集——これらはスコットランドの過去およびかれらの多くの人々が属していた著名な家族・一族の過去に光を当てることができた⁽¹³⁾——は、18C全体にわたって、スコットランド史家によって利用されることができた。これらと類似した活動は他の分野でも追求されるが、このとき、スコットランドの品位と名誉とが常に意識され、念頭に置かれて、これらの活動を促す原動力となった。このような活動のない手の中心であった古物研究・収集家たちは、また、スコットランドの測量・調査計画——18C後半まで、けっして体系的に実行されることはなかった——のような改良活動にも関心をもち、とくに、シッバルト自身による著作や、かれの直接・間接の勧めによる、スコットランドのいろいろな地域にかんする総合的な地誌的研究・著作——これらには住民の数、かれらの生活、気候、地理、自然災害、風土病など種々雑多の記述がふくまれていた——が、このことを最もよく示している。⁽¹⁴⁾

ところで、1680年代まで、スコットランドでは、上述の改良で中心的役割を演じた、古物研究・収集家たちが構成する正式のクラブは存在しなかったようだが、1688年の名誉革命直前のエディンバラに、このようなクラブが少なくともいくつか存在したであろうと推測されている。スコットランドのみならず広くブリテン、ヨーロッパにおいて、クラブや協会が、社会・文化・芸術・学問・思想

において持った重要な役割についてはよく知られているが、⁽¹⁵⁾ 18Cにおいて全盛を誇った、このようなクラブのはしりがこの時期に（特に1680年代末）見られるとはいえず、名誉革命の政治的・社会的混乱のなかで消え去らざるをえなかったであろう。⁽¹⁶⁾ また、同じころ、エディンバラ大学に歴史の欽定講座を創設しようとする計画が立てられたが、これも上述と同じ理由・原因で実現しなかった。⁽¹⁷⁾ しかしながら、革命直後の1688～89年に、歴史家（自然史家をふくむ）や古物研究・収集家にとって、永続的な重要性を持つ、ひとつの制度の創立を見た。すなわち、マッケンズィ Sir George Mackenzie によって創設された、上級弁護士会図書館 Advocates' Library である。これは、本来法律家のための公共図書館として設立されたにもかかわらず、設立の当初から、それ以上の性格を持たされていた。というのは、この公共図書館は、急速に、マニユスクリプトや記録資料類、コイン、その他いろいろな品目の貯蔵庫となった。⁽¹⁸⁾ (266-7)

ところで、1680年代には、スコットランドの大学都市でも、この時期には既に存在していた、ロンドン、オクスフォード、ダブリンなどの哲学協会に見倣って、同じような組織を設立しようとする努力と試行がなされた。このようなクラブ組織をスコットランドでも設立しようとする誘因そのものは、主としてイングランドをつうじてもたらされたが、この組織の設立を促進・推進しようとする人々の考えでは、スコットランドでも今や、このような団体を設立し、組織・運営していくことができるのに十分な資格・能力と規模をもつ知識人層が存在しており、かれらはまたこのような組織・団体に大きな関心を持っている、ということであった。このような努力はこの段階では必ずしも実を結ばなかった。⁽¹⁹⁾ (267)

エマアスンは、上述の努力を例証する、いくつかの事実をあげている。それによると、1684年9月16日付けの手紙で、オクスフォード哲学協会会長ジョン・ウォリス John Wallis は、キングズ・コレッジ（オールド・アバディーン）の前学長アレキサンダー・ミッドルトン Alexander Middleton にあてて、哲学協会とオールド・アバディーンの教師たちとの交流を懇請している。この手紙に返信したのは、当時の学長であったミッ

ドルトンの息子ジョージだったが、両者のあいだでの何通かの手紙から次のことが窺える。二人が一致して、アバディーンで哲学協会を組織し運営していくことのできるのに最もふさわしい人物として想定したのは、キングズ・コレッジの前リージェントであり、シッバルトの文通者でもあった、ジョージ・ガーデン George Garden であった。ガーデンは、ロイヤル・ソサイアティの『哲学雑誌』を購読し、また寄稿もしており、哲学協会のベーコン的原理にもとづく設立計画の趣旨に完全に承認と支持をあたえており、アバディーンでのこの種の協会設立の実現に熱心であった。かれは、提案されているアバディーン・ソサイアティについて、優れた才能や天賦の才を持つ人々の不足に悩むことがあろうとも、関心・興味をもつ人々には事欠かないと考えていたし、また、オクスフォード哲学協会と『哲学雑誌』によって与えられる知的刺激を評価し、アバディーン哲学協会に参集してくるであろう人々に「新たな論文・論説を執筆する機会」を提供する可能性を評価した。かれはまた次のように述べた。すなわち、この協会を構成する人々は、すばらしい性能をもつ望遠鏡、気圧計、ひじょうに精巧な顕微鏡を所有しており、これらによって、天気や天体の観測に加わり、顕微鏡による観察を説明し、これをつうじて、この国の自然史にかんする知識を増大させ、改良を推進するであろうし、医学者たちも、化学や医療技術をつうじて、上述の計画に必ずや貢献するであろう、と。このようなアバドニアンたちは、当然にも、新しい思想と科学に関心と興味をもっていただばかりでなく、それを積極的に承認・受容し、さらに、投資さえたのである。ここには、キングズ・コレッジとマリシャル・コレッジのリージェントのほとんど、また、医学者たち（開業医、外科医をふくむ）がふくまれるとともに、これらの学者に加えて、フォーブス卿 Lord Forbes of Pitsligo——神秘的傾向をもつ、かれの宗教的見解は、ガーデンやミッドルトンと共通していた——のような、貴族ヴァーティウソウもふくまれていたと推測される。いずれにしても、1680年ごろと遅くとも1717年とのあいだのアバディーンでは、人的にも能力的にも十分な知識人層の成長がみられるとともに、かれらの宗教的——新しい思想と科学の価値を承認・受容することのできる——信

念と科学とその価値にたいする信念とが、とくにキングズ・コレッジやマリシャル・コレッジで既に制度化されていたか制度化されつつあったと見ることができる。(267-8)

以上がアバディーンの状態であるが、エマアスンによれば、ウォリスは1684~85年ごろに、セント・アンドルーズのセント・サルヴァター・コレッジ St Salvator College の学寮長アンドルー・スキーン Andrew Skene とともに、同じ主旨の通信をかわしていたのであるが、スキーンにも、ベーコン的原理にもとづく、学問的な協会の設立計画を歓迎しているが、かれじしんは、真の実験と経験にもとづく哲学に好意を示すのと同じ程度でアリストテレスにも思いやりのある言葉をかけたといわれる。このようなセント・アンドルーズ協会そのものは実現することはなかったのだが、残された資料（両者の手紙をふくむ）から窺えるのは、この時期、セント・アンドルーズには、愛国的な古物研究・収集活動を発酵させながら、自然史やいろいろな実験的試み、そして改良に強い関心を寄せる、協会設立計画実現を担うに足る資格と能力をもつとみられる自然哲学者として、少なくとも、教学教授サンダース Mr. Sanders、前述のスキーン、リージェントのローレンス・カニングムとアンドルー・カニングム Lawrence and Andrew Cunningham の名前をあげることができる。ところで、ジェイムズ・グレゴリ James Gregory が1688年に新しく創設された、数学と自然哲学の欽定講座の席を獲得したことが示しているように、セント・アンドルーズでの科学にたいする関心は新しいものではなかった。この講座の創設そのものが、この科目にたいする一般の関心が並々でなかったことだけではなく、この講座の創設を承認し決定した為政者の関心をも示している。グレゴリの影響は、かれが単にユークリッドや二次方程式を教えること以上であった。たとえば、かれは、大学が天文台の設置とそれに関連するいろいろな器具類の購入のための資金を獲得する活動にも関与した。天文台そのものは、かれがエディンバラへ去った（1674年）後の教授サンダース（前述）のもとで完成された。このように、セント・アンドルーズの記録もまた、この時代における不毛ではなく、順応と近代化を示している。⁽²⁰⁾

名誉革命から18C初めにかけて、当時台頭しつ

つあったプロフェッショナル——すなわち、開業医や大学の教授たちや弁護士などの法律家などから構成される専門職業階級——と貴族階級の一部が、愛国的な改良活動家として一同に会して、議論したり、愛国的な出版物を刊行したりする舞台として機能したのが、多くのクラブや協会であった。もちろん、1720年以降顕著にその数を増大させていく、学芸クラブや協会の存在に比較して、この時期のこれらの存在を証明する強力な証拠資料は乏しいのだが。

エマアスンによれば、前述の古物研究・収集家たちのクラブ（名誉革命直前に存在したとされる）が革命後も存続していた可能性も否定できず、たとえこのクラブではなくとも、1703年ごろに、定期的に集会を開き、また、1690年と1710年ごろのあいだの政治的・社会的・経済的に困難な時代に現れた多くの愛国的な出版物の刊行に関係したと考えられる、クラブの存在が指摘できる。このクラブの指導者はシッバルトであったと推定される。かれの広範囲にわたる著作——古物研究・収集家としての——は、自然史、植物学、農業、地誌、地図製作、歴史と改良にまで及んでおり、このクラブの活動と関心を示す指標とみなすこともできよう。⁽²¹⁾ とはいえ、このクラブの寿命については不明だが、おそらく、ほんの2～3年であったと思われる。ところで、1710年ごろのエディンバラには、すくなくとも、古物研究・収集家たちのふたつのグループが存在していた。これらは、それぞれ、アンダースン James Anderson（ウィック）とルディマン Thomas Ruddiman（ジャコバイト）によって指導され、ヴァーティウソウ・クラブを構成していた。⁽²²⁾ 両者のグループの誰もが同じように、自然史や地誌にかんする研究、古物の研究・収集などの活動を、単なる知的好奇心の追求と満足にとどまらない、愛国的な価値をもつと確信し、いろいろな方法・手段で、スコットランドの改良をはかり、貢献しようとした。このように、この時期の、いろいろなクラブの構成員たちは、1737年のエディンバラ哲学協会⁽²³⁾に参加するのに十分な資格と能力——civilでpoliteな——を備えるにいたっていた。⁽²⁴⁾ (269-70)

ところで、上述の古物研究・収集家たちのクラブと同じように、他のヴァーティウソウ・クラブも存在したと思われるが、これについては何もわ

からない。しかし、1690年代には、自然哲学・科学にかんするクラブが形成され、1705年には、同じ性格をもつ別のクラブが、おそらく短命であっただろうが、存在していた⁽²⁵⁾ことが知られている。また、1716年ごろには、エディンバラ大学内に、ランケニアン・クラブ——哲学クラブの一つ——が存在しており、1770年代まで存続した。1720年代には、二つのより確かで十分な構成をもった協会——スコットランド農業知識改良者協会 Honourable Society of Improvers in the Knowledge of Agriculture in Scotland（1723年）とエディンバラ音楽協会（1726年）——が創設され、1730年代初めには、ふたつの医学クラブ——ひとつは1737年のエディンバラ哲学協会の創設のさいに会員を供給し、別のひとつはロイヤル・メディカル・ソセィティとして現在まで存続している——の創立を見た。⁽²⁷⁾ (270)

17C後期スコットランドの文化的・知的生活を向上・改善し、それとともに、とくに自然哲学とそれに関連する学科目の採用・追求を促進しようとしたのは、学者や法律家や医学者だけではなく、というの、国王や王室権力もまた文化と学問を自らの権力の維持と強化のために利用しようとした。学問にたいするパトロネッジが、巧妙に操作され、統制され、利用されるに値する手段・方法と見なされた。これに該当するのが、革命前10年間におけるヨーク伯すなわちジェームズVII（イングランドのジェームズII）の、学問・文化にたいする奨励・保護政策であった。⁽²⁸⁾

ヨーク伯は絶対主義的政治政策と思想を確立・浸透させようとした。そのために、いろいろな制度・組織の創設に関与するとともに、学問にたいするパトロネッジを盛んに利用した。このようにして新たに創立されたり特許上を授けられたりした制度・団体として、前述のロイヤル・コレッジ・オブ・フィジシャンズ、上級弁護士会および図書館、エディンバラ大学——1685年にエディンバラ・コレッジの地位は大学 University という呼び方を承認されて高められた——、植物園（前出）、ロイヤル・ジョグラフィャ Geographer Royal の職——1682年、シッバルトが任命された——などを挙げるができる。いずれにしても、1680年代には、改良の追求が、現実のものとなり、増大しつつあったことが理解できる。(270)

ところで、1663年と1715年のあいだに、39人のスコットランド人が王立協会 Royal Society of London の会員⁽²⁹⁾ に選ばれた。このうちの約半数の人は、イングランドで多くは医学の分野で成功を収めた——とくに1688年以降その数が増大する——海外移任者 expatriates であった。このことは、スコットランドで教育（とくに大学）を受けた人々に雇用の機会を提供し満足させることのできなかつた——雇用機会の絶対的不足と名誉革命後の宗教政策の変化にもとづく社会的・政治的混乱による相対的不足——事情を明らかにしているが、このような海外での成功の実例は、大学での改良された教育を促進する契機となったであろう。また、ダヴィット・グレゴリ David Gregory、ハットン John Hutton、John and James Keill、George Cheyne、Patrick Blair、John Arbuthnot のような人々の輝かしい成功は、国外で功なり名を上げざるをえない人々にとって、医学や科学研究が成功のための実践的・実際の価値を持っていることを、はっきりと実例をもって示していた。また、国外で身をたてざるをえなかつたとはいえ、かれらは、スコットランド内の友人や家族との密接な結びつきを絶つた訳ではなかつたので、主としてロンドンからもたらされる、かれらの情報は、スコットランドのヴァーティウソウを刺激し、鼓舞した。また、科学と医学が重要な役割を演じていたヨーロッパ規模での「知的共和国 Republic of Letters」に、かれらもその一員として属しているのだと強く実感させるのに大いに貢献したであろう。前述のロイヤル・コレッジ・オブ・フィジシャンズ（1681年）の創設に見られた、医学者の模倣行動（ロンドンやフランスやオランダでの例）やクラブや文芸・学問協会を設立・運営しようというジェントルメンの同様の模倣行動は、外国旅行や外国での教育の際の経験や見聞・知識にその根拠をもっていた。さらに、これらの行動はヨーロッパの先進都市・地域で進行しつつあった事態にたいする持続的で意識的な関心と認識——上述の海外移住者（イングランドをふくむ）の情報と経験によって支援・補強された——にもその基礎をおいていた。これらの海外移住者の成功例や通信・手紙によって、大学での医学教育や自然哲学の教育・研究が、「ギニー（スコットランドの通貨名すなわち収入を意味している——高田）

と名声・名誉 guineas and prestige」(271) をもたすことができるし、また現にもたらししている有益で有利な手段・方法であることが、はっきりと実証された。さらに、この時期——1660～1715年——に、同じように王立協会の会員に選ばれた人々のうちに、12人の有力政治家がふくまれていた。かれらはすべて貴族階級に属していた。かれらのほとんどは、若い時にカヴァンタァ Covenanter すなわち熱烈な長老主義信仰の擁護者であったけれども、本質的にはロイヤリスト＝王政支持者⁽³⁰⁾ であった。かれらは、1660年には監督派教会 Episcopacy に従い、1690年には長老主義 Presbyterianism に従った。このように、かれらは一般にどちらかといえば宗教的不服従者にたいして厳しい政策を課すことを欲しない、寛容な人々——というよりも宗教的ナポチュニスト——であった。かれらはすべてが外国旅行を経験しており、すべてが軍事的性格をもつ事件にかかわりを持ち、それを切りぬけてきていた。また、かれらすべてが何らかの官職を持ち、何らかのパトロネッジを行使・提供できる地位と権力を保持していた。かれらの科学・自然哲学にたいする関心は、かれらのこの側面での研究や教育の能力以上に大きな影響力をもった。確かにこの分野での研究実績と名声を持つヴァーティウソウとして挙げられる人もいたが、かれらのほとんどの会員資格は、何らかの科学・自然哲学の分野での業績・功績によっていたわけではなかつた。このことは、この王立協会という組織そのものが、単なる科学的に尊敬すべき人々の集まりであつたばかりではなくて、また、上流階級の社交界的性格をも持っていたことを示している。この意味で、かれらの会員資格は、かれらが少なくともベーコン的原理を支持していること、また、かれらが共通にもっていたヴァーティウソウとしての関心を、共有し、共感を寄せ、発展させてくれる人々を支持・育成し、さらに、これらの人々が適切な地位と身分を獲得できるようにパトロネッジを行使したか、行使すると期待されているかのどちらかであつたことを示している。この場合、パトロネッジの対象である地位と身分に任命されうる人々の資格として、かれらの政治的立場・考え方や経済的に困窮していることが、科学的関心の強さや業績以上に重要視されたが、この場合、前者についてよりも

後者の側面がより多く考慮されて、同じような信条を持った人が任命されることがあった。さらに、かれらが王立協会会員であるという事実そのものが、たとえスコットランドで科学の促進のために何もしていなくとも、かれらが神の栄光と人類の利益のために自然哲学や自然認識・知識の函養と発展を追求しそれを助成・奨励したという、かれらの能力と資格に正当性を与えたばかりでなく、これらの活動そのものにも社会的な承認と正当性を与えるのに大いに貢献したであろう。また、これとまったく同じことが、王立協会の会員ではなかったが、改良と科学にたいする熱心な関心と活動を一般に知られていた、別の40人ほどの貴族とジェントルメン⁽³¹⁾についても、当てはまる。前述の40人と合計して、約80人になる、これらの貴族たちは、集団としてみれば、その数においても、その影響力においても、スコットランド貴族階級の重要な部分と割合を占め、かつ代表していた。かれらは、教授、教師（大学以外の教育機関の）、将校、タウン・カウンセラー、さらに、その他の社会的に比較的低い地位の獲得やそれらへの採用にたいしてパトロネッジを行使できる立場と権力をもっていた。また、当時のスコットランドの人口からみても、⁽³²⁾かれらの社会的影響力は、とくに知的・文化的側面において、相対的に大きなものであった。1650年ごろと1715年とのあいだに、スコットランドの諸大学で生じた教育改革の動き⁽³³⁾が、かれらのパトロネッジと無関係ではなかったであろう。⁽³⁴⁾もちろん、これらの貴族や上流階級の人々が、フランスやオランダの大学で教育、訓練をうけた専門職業階級の人々と同じ程度で、新しい思想や科学の導入において重要な役割をはたしたということとはできないが、かれらは、前述した種々のクラブや法律団体、外科医や内科医のコレッジなどで、新しい思想・科学の導入・普及のために活発に活動したのであり、この点では、かれらの18Cの後継者たちとほとんど違いはなかった。1680年代には、専門職業階級の人々がエディンバラの社会的・知的指導者の一部を占

めるようになったし、これとともに、「交通、奢侈、娯楽、教育〔の面〕での、近代的な都市の社会生活のための諸施設・制度」の推進・拡充・発展という目標が、既に設定されていた。⁽³⁵⁾これらの目標は1750年代にのみ実現されるのだが、このように、1680年代のいわゆる「ロイヤリスト啓蒙⁽³⁶⁾ Royalist Enlightenment」の思想と運動は、1688年の革命によって混乱させられたといえ、かれらが制度化し、定着させた価値——新しい科学と思想にたいする——は継続して生きつづけ、1690年以後も、ロイヤル・パトロネッジを受容・利用しながらも、それに伴う絶対主義的プログラムはこれを拒否するという人々によって、効果的に促進・進展されていった。この時代に成立しつつあった、このような専門職業階級の人々とかれらの支持者たちは、かれらの確立しつつあった知的指導力を発揮して、個人と制度をつうじて、啓蒙主義・思想が定着した18Cエディンバラの社会に、貢献することができた。また、この世代の人々は、さらに二つの点の貢献をした。すなわち、この時代の反聖職者主義 anti-clericalism と宗教的権威の一般的な弱体化（とくに1690年以降）であり、これらは、貴族たちが洗練された学問 polite learning を大学に導入するのを容易にしたし、これとともに、自然哲学や科学——これらもまた polite なものとして追求されるべき科目と見なされるようになった——にたいする態度の変化にも影響をおよぼした。このような発展の結果として、1740年代に、マクローリン Colin MacLaurin やカレン William Cullen のような教授たちによって実行された講義（大学内外での）——有益かつ洗練された——を産みだした。同時に、より寛容で世俗的な傾向の増大をもたらし、このような世俗文化の支配のもとで、自然哲学、科学、技芸 arts がより重要なものとして、最終的には他の分野——とくに宗教と政治——に関係なしに、それ自体価値あるものとして追求できるものと見なされることになった。（271-3）（未完）

注

- (1) 本稿は、『研究季報（奈良県立短期大学）』37-4（平成2年3月）所載の同表題論文（37～51ページ）の続稿である。
- (2) エマアスのスコットランド啓蒙にかんする研究には、次のものがある。以下では、論文の番号をもって示す。前出稿と本稿とのあいだに、関連する論文⑧、⑨が発表されている。
- ① 1973 “The Enlightenment and Social Structure”, in : Fritz, P. and D. Williams (eds.), *City & Society in the Eighteenth Century*, Tront, pp. 99-124.
- ② 1973 “The Social Composition of Enlightened Scotland ; the Select Society of Edinburgh, 1754-1764”, *Studies on Voltaire and the Eighteenth Century*, 114, pp. 291-321.
- ③ 1977 “Scottish Universities in the Eighteenth Century, 1690-1800”, *Ibid.*, 167, pp.453-74.
- ④ 1979 “The Philosophical Society of Edinburgh 1737-47”, *The British Journal for the History of Science*, Vol.12, No. 41, pp.154-91.
- ⑤ 1981 “The Philosophical Society of Edinburgh 1748-68”, *Ibid.*, Vol.14, No. 47, pp.133-76.
- ⑥ 1985 “The Philosophical Society of Edinburgh 1748-68”, *Ibid.*, Vol.18, pp. 255-303.
- ⑦ 1986 “Natural Philosophy and the Problem of the Scottish Enlightenment”, *Studies on Voltaire and the Eighteenth Century*, 242, pp.243-91.
- ⑧ 1988 “Sir Robert Sibbald, Kt, the Royal Society of Scotland and the Origin of the Scottish Enlightenment”, *Annals of Science*, 45, pp.41-72.
- ⑨ 1989 “Science and Moral Philosophy in the Scottish Enlightenment”, in : M. A. Stewart (ed.) *Studies in the Philosophy of the Scottish Enlightenment*, Oxford, 1990, pp. 11-36.
- (3) エディンバラの植物園については、Cf., A. C. Chitnis, *The Scottish Enlightenment : A Social History*, London, 1976, pp.232-3.
- (4) () 内の数字は、エマアスの⑦論文のページをしめしている。以下では、⑦論文のページは、同じように表示される。
- (5) この年に、エディンバラ・ロイヤル・コレッジ・オブ・フィジシャンズ Royal College of Physicians of Edinburgh が設立された。この設立には、シッバルト、ピットケアン、バルフォアが、大きな貢献をした。Cf., Chitnis, *op. cit.*, pp.129-30 ; Emerson⑧. 抽稿「18世紀スコットランドの大学」『経済学雑誌（大阪市大）』90-5・6、67～8ページ。
- (6) この教授職そのものは、教会の反対と大学の財政的貧困のために、1646年には、消滅してしまった。この後、シッバルトが医学教授に、他の二人の内科教授とともに、任命されたのは、1685年のことであった。Cf., 264 ; Chitnis, *op. cit.*, pp.134-5 . 前出抽稿、68ページ。
- (7) ヨーロッパ規模でのヴァーティウソウの存在とその活動・意義と啓蒙思想の成立との関連、そして、スコットランドにおける両者の関連については、エマアス⑧参照。
- (8) エマアスが主として典拠としているのは次のものである。H. R. Fletcher and Brown, W. H., *The Royal Botanic Garden Edinburgh 1670-1970*, Edinburgh, 1970.
また、サザランドは著名な古銭の研究者であり、かれのメダルやコインの収集は上級弁護士会図書館（後述、さらに、注（18）参照）によって購入されたという。Cf., 264n93.
- (9) この医学クラブが、ロイヤル・コレッジ・オブ・フィジシャンズへと発展していった。Cf., Emerson ⑧ p.45.
- (10) W. S. Craig, *History of the Royal College of Physicians*, Oxford (Philadelphia), 1976, p.17. このような講演や議論は1681年以降も散発的に続けられ、コレッジそのものがエディンバラ地域の医学者のための、一種のヴァーティウソウ・クラブのような役割をはたした、といわれる。Cf., 265n95.
- (11) エマアスは外科医組合について異なった表現を

している。Edinburgh Incorporation of Chirurgeons (263) とChirurgion's Company (265) である。ここでは、どちらも同じものを指すものとして、外科医組合と訳しておいた。

(12) このようなパトロネッジの例として、エマアスは次のことを挙げている。

シッバルトは1706年にエディンバラで行われる医学講義について広く周知し、バルフォアはジェイムズ・グレゴリがアバディーンからエディンバラの数学教授へ移るのに力を貸し、ピットケアンは1706年から1709年のあいだマール伯爵 Earl of Mar の助言者であり、1708年チャールズ・グレゴリ Charles Gregory をセント・アンドルーズの数学教授に推薦したり、マリシャル・コレッジの数学教授の任命にも関係していたといわれる。パトロネッジについては、注(33)も参照。

(13) シッバルトとバルフォアがこのようなコレクションを残している。

(14) メンディクは、シッバルトとかれの仲間たちが「科学者」と呼ばれるのにふさわしいスコットランドで最初の人々に教えられる、という。また、かれらが17C後半と18C初期に行った、詳細な自然史にかんする地域・地方研究が、現代と共通する、環境科学と実地考古学 field archaeology とのあいだの密接な結びつきを示している、と。Cf., Stan Mendyk, "Scottish Regional Natural Historians and the Britannia Project", *Scottish Geographical Magazine*, 101 (1985), pp.165-73. メンディクは、また、シッバルトのこの分野での著作と強学な指導性について、さらに、この分野での研究の、スコットランドとイングランドやオランダとの結びつき、スコットランドでこれらとは独立して行われていた(主として聖職者による)研究の伝統について、述べている。この面についても、メンディク論文参照。また、次のものも参照。Cf., Emerson⑧, pp.54-8.

(15) スコットランドにおけるクラブや協会の活動について、今のところもっとも詳細に論じていると思われる、Davis D. McElroy, *Scotland's Age of Improvement: A Survey of Eighteenth-Century Literary Clubs and Societies*, Washington, 1696 でも、このようなクラブのさいしょのものとして挙げているのは、1712年ごろに、アラン・ラムジ Allan Ramsay が属していた、Easy Club であるが、マッケルロイは、明瞭に改良を目的として掲げ

たものとして、1716年のランケニアン・クラブ Rankenian Club と1723年設立のスコットランド農業知識改良者協会に注目している。Cf., McElroy, *op. cit.*, pp. 7, 14-24.

(16) エマアスは、Buchan 伯爵がマッケンズィのエディンバラに属していたと述べている時期について、それが1689年より以前であったとしている。典拠は、W. Smellie, *Account of the Institution and Progress of the Society of Antiquaries of Scotland*, Edinburgh, 1782, p.12. Cf., 267n105.

(17) エディンバラ大学の歴史の教授職およびその最初の教授チャールズ・マッキイについては、Cf., L. W. Sharp, "Charles Mackie, the First Professor of History at Edinburgh University", *Scottish Historical Review*, 41 (1962), pp. 23-45. この論文はもともと1946年にスコットランド歴史学会エディンバラ部会で行われた講演である。また、次のものも、参照。田添京二「スチュアートとマッキー教授」『商学論集(福島大学)』49-4、50-1。

(18) 『インサイクロペディア・ブリタニカ』初版によれば、この図書館は、「ヨーロッパの法律書の最善のコレクションばかりでなく、あらゆる主題にかんする書籍の非常に大きくて一流のコレクションも」所蔵し、さらに、「多くのオリジナル・マニュスクリプトや非常に多様な、ユダヤやギリシアやローマやスコットランドやイングランドのコインとメダル」も所蔵していた。1779年には3万冊を所蔵していたという。Cf., *Emcyclopedia Britannica*, Edinburgh, 1771, Vol. 1, p.29.

この図書館の起源事実上1679年に始まる。このことともに、この図書館の成立が、17C後半における専門職業階級としての法律家たちの政治的・社会的影響力の拡大と関連していることについては、Cf., Hugh Ouston, "York in Edinburgh: James VII and the Patronage of Learning in Scotland, 1679-1688", in: John Dwyer, Roger Mason, and Alexander Murdoch (eds.) *New Perspectives on the Politics and Culture of Early Modern Scotland*, Edinburgh, 1980, pp.147-9.

なお、Faculty of Advocates について、とくに、Advocates を「上級弁護士」と訳するのは角田猛之氏に従っている。第15回社会思想史学会インフォーマル・セッションでの同氏の報告「スコットランドの法文化」とそれをめぐる討論によっている。(1990

年10月13日、中央大学駿河台記念館)

(19) エディンバラ哲学協会の設立そのものは、次の時代のスコットランド知識人たち（モンロ・プライマスやマクローリン）によって主導されて、1737年に陽の目を見た。これについては、Emerson ④, ⑤, ⑥ が詳細にとりあついている。また、次のものも参照。Cf., Chitnis, *op. cit.*, pp.198-9; McElroy, *op. cit.*, pp.27-9.

エディンバラ哲学協会の設立に刺激されて、グラスゴウとアバディーンに生まれた、類似の組織——グラスゴウでは文芸協会（1752）、アバディーンでは哲学協会（1758）——については、Cf., McElroy, *op. cit.*, pp.41-8.

(20) Cf., Ronald G. Cant, "The Scottish Universities and Scottish Society in the Eighteenth Century", *Studies on Voltaire and the Eighteenth Century*, 58 (1967), pp.1953-66; do., "Origins of the Enlightenment in Scotland: Universities" in: R. H. Campbell and A. S. Skinner (eds.) *The Origins & Nature of the Scottish Enlightenment*, Edinburgh, 1982, pp.45f.; Chitnis, *op. cit.*; 前出抽稿、66、68ページ参照。

(21) シッバルトの多彩な活動と生涯については、Emerson ⑧ 参照。また、注 (14) 参照。Cf., *Chambers. A Biographical Dictionary of Eminent Scotsmen*. New ed., by Thomas Thomson (1870), New York (Olms) 1971, pp.349-50.

(22) ルディマンは、シッバルトとピットケアンの子分 protege であり、1700年ごろ二人の仲間の一員になり、1702年に上級弁護士会図書館の司書となり、1718年に「古典的学問・知識を改良するための協会」——定期的に集まって、議論・討論するが、宗教と政治にかんする問題はあらかじめ排除するという規則をもつ、クラブ——を設立した。この協会は1720年代中頃には消滅した。同じころに、ルディマンによる、ジョージ・ブキャナンの著作の編集——いわゆるジャコバイト的傾向をもつ——は、同じようにスコットランド文芸の愛国者ではあるがルディマンの熱望——ブキャナンを宗教改革の共和主義的なプロテスタントの英雄として定義しようとする——に反駁しようとする、ウィッグ派学者たちのクラブ（1717年ごろ）——批評家連合 The Associated Critics として知られる——の結成を喚起することになった。Cf., Emerson ④, p.156. エマアス

ンはここではこの批評家連合の指導者がアンダスンとはいっていないが、ウィッグ派との規定からみて、まちがいない。ブキャナンの編集をめぐる確執とそれぞれのクラブについては、マッケルロイも言及している。Cf., McElroy, *op. cit.*, pp.23-6.

(23) エディンバラ哲学協会については、注 (19) 参照。

(24) 17C末に計画されていたが実現されなかった、シッバルトによるスコットランド・ロイヤル・ソシアリティについて、エマアスは、⑧で詳述している。また、⑧の付録には、そのときに設立メンバーとして、シッバルトが想定していた人々の名前、予想役員名、1700年におけるスコットランド在住のヴァーティウソウの一覧表、さらに、1680年ごろから1717年ごろまでに存在していたと推定されるヴァーティウソウ・クラブについて、その存続時期、主要構成員、これらの典拠資料が、まとめられている。Cf., Emerson ⑧, pp. 46-51, Appendix I-V.

(25) この時期のクラブについては、Cf., Emerson ⑧, p.72, Appendix V. 注 (23) 参照。マッケイルロイは、1702年に John Spottiswoode —— 後の上級弁護士会図書館の管理人 Keeper —— がスコットランドの物産と貿易にかんする体系的研究を行う協会を計画していた、という。Cf., McElroy, *op. cit.*, p.31.

(26) ランケニアン・クラブは、このクラブの毎週の集會が開かれた会場となったタヴァン Tavern の所在地の領主、トマス・ランケン Thomas Ranken の名前から、クラブ名をとったという。このクラブについては、Cf., Emerson ④, pp.156, 184; McElroy, *op. cit.*, p.22-3; Chitnis, *op. cit.*, 197-8.

(27) この医学クラブのひとつは、モンロ・プライマスによって設立・指導された。Cf., Chitnis, *op. cit.*, p.198. また、このクラブの、マクローリンによる、対象分野拡大と哲学協会の成立過程の詳細な分析については、Cf., Emerson ④, pp.157-8, 161-70.

(28) この問題については、前出の Ouston に詳しい。Cf., Ouston, *op. cit.*

(29) エマアスは、付録 I で、スコットランド人の会員について、17C後半と18C初めに入会した、39人——14人の貴族とその他の25人——の氏名を一覧表にまとめている。Cf., 289.

(30) Ouston は、この時代の啓蒙主義者とかれらの思想を Royalist Enlightenment と定義している。Cf., Ouston, *op. cit.*, p.153.

(31) かれらについても、エマアスンは、付録Ⅱで、47人の氏名—— Antiquaries (16人)、Naturalists and Virtuosi (12人)、Improvers (19人) ——をまとめている。Cf., 291-2.

(32) 1750年の推計では、スコットランドの総人口は125万人といわれ、そのうち3分の1から4分の1はハイランドに住んでいたといわれる。Cf., T. C. Smout, *A History of the Scottish People, 1560-1830*, 2nd ed., Glasgow, 1970, p.501.

また、18Cのあいだに、エディンバラの人口は4万人から7万人に、グラスゴウでは1万5千人から8万人に、ニュー・アバディーンでは1万人から3万人へ増大した。セント・アンドルーズは4千人で推移した。Cf., *ibid.*, p.449.

大学都市の人口と学生数の推移(18C)については、Cf., Chitnis, *op. cit.*, pp.133-4.

(33) これについては、簡単ではあるが、前出拙稿「18世紀スコットランドの2学」参照。

(34) エマアスンは、拡大学の教授職の一部について、これらのポストについた教授名とかれらのパトロネッジ行使者名を挙げている。その一部は次のとおり。Cf., 272n123; Chitnis, *op. cit.*, pp.153-6.

Edinburgh University

1692 James Gregory, Professor of Mathematics

(Sir Andrew Balfour)

1701 Charles Aerskine, Regent
(Earl of Mar)

Glasgow University

1690 William Dunlop, Principal
(Sir Robert Sinclair, Lord Justice Clerk)

1714 John Johnston, M. D., Professor of Medicine
(Earl of Mar)

St Andrews University

1708 Charles Gregory, Professor of Mathematics
(Dr Archibald Pitcairne, Earl of Mar)

King's College

1703 Thomas Bower, Professor of Mathematics.
(Dr Archibald Pitcairne, Earl of Mar)

1711 William Simpson, Rgent
(Earl of Seafild)

(35) これは、Ouston の主張するところである。Cf., Ouston, *op. cit.*, p.153.